シンポジウム

「翻訳・通訳のコミュニケーションをめぐって」
第24回JASEC年次大会シンポジウム
2015年10月3日　於：関西学院大学

山 本 英 一
(関西大学)

JASEC 第２４回年次大会では、標記タイトルのもと、山本が司会役を務め、日頃から翻訳・通訳の現場で活躍する専門家３名に登壇いただき、シンポジウムを行った。 その趣旨は以下の通り。

翻訳・通訳の問題は、日本語および英語によるコミュニケーションを考える上で、避けて通ることのできない課題といえる。いずれの場合も、語彙の意味を確定するためには、コンテクストを参照しなければならないが、そのコンテクスト自体、言語が異なれば理解が異なることは容易に予測される。メッセージの発信時と受信時の違いもまた、コンテクストの理解に大きな影響を及ぼす。さらに、純粋に談話を照合することに留まらず、テーマに関連する専門知識や背景知識など、非言語的情報を含む包括的な情報が、適切な言語表現の選択に大きく関わる場合もあり得る。本シンポジウムでは、小説の翻訳（伊原）、ニュースの翻訳（小田）、同時通訳（平島）の観点から事例を検討し、翻訳・通訳によるコミュニケーションの仕組みと問題点を明らかにしたい。

以下、各登壇者の発表要旨である。

シンポジウム

翻訳・通訳のコミュニケーションをめぐって

小田　真
（毎日新聞社英文毎日室）

一口に翻訳といっても、分野は多岐に分かれる。実務翻訳、技術翻訳、特許翻訳、ニュース翻訳等である。だが、それらに共通するのは、日本語の原文を正確に分かりやすい英語に変換することである。それぞれの分野によって流儀は異なるが、単なる言葉の置き換えではなく、原文を噛み砕き、その意味を完全に理解し、自分の言葉で readable な英文で表現することである。

ここでは、ニュースの日英翻訳のコミュニケーションプロセスを中心に述べる。

文字媒体における日本語と英語のニュース記事は、放送の場合も同様だが、論理の流れが根本的に異なる。したがって、日本語の記事を原文の流れのまま英語に直訳した場合。読者、とくに英語を母語とする読者にとっては極めて読みづらい記事になる。

ストレートニュースの記事は、日本語も英語も、共に逆ピラミッド型の構造になっているのが特徴である。リードパラグラフと呼ばれる書き出しの文章には main point のみが書かれ、detail は第 2 パラグラフ以降に書かれている。前のパラグラフには重要な情報が書かれ、後になるほど重要度は減じる。紙媒体の場合は紙面スペースに限りがあり、全文掲載出来ない場合は、後ろのパラグラフから切っていけば良いようになっている。

とは言え、日本語と英語のニュース記事の構造はかなり異なる。日本語の記事はリードを含め各センテンスに多くの情報が詰め込まれていて、比較的長いのに対し、英文ニュースは、リードからは無駄が徹底的にそぎ落とされ、ニュースの本質のみが書かれ、短い。第 2 パラグラフ以降も日本語の記事の場合多くの情報が詰め込まれているのに対し、英文記事はシンプルである。換言すると、日本語のニュース記事は緩やかな逆ピラミッド構造になっているのに対し、英語の場合はより急な逆ピラミッド型といえる。

そのために、日本語ニュース記事を英訳する場合には、言語の変換のみならず、文章の構造を再構成する必要がある。

ニュース翻訳の実例は、紙面スペースの関係で割愛するが、日本語の流れに沿って訳すのではなく、原文を読んで、訳そうとするニュースの本質、単純に言えば「要するに結論は何なんだ！」という点を全文の中から拾い上げ、リードとして英訳する、次に detail の中から最も重要な点を拾い上げ、英訳したものが第 2 パラグラフとなる、次に大事な点を拾い上げ、第 3 パラグラフとして訳す。これを繰り返す。要するに、ニュース翻訳は、「翻訳」といっても原文は取材した「ネタ」と考え、それを元に英文ニュースのスタイルで、自分の言葉で新たに原稿を書くと考えた方が良い。

これはニュース翻訳独特の作業であり、実務翻訳者がストレートニュースを訳すと、ベテランであっても、原文の流れのまま訳してしまい。英語としては高品質であっても、編集者は大幅な書き直しをせざるを得なくなる。これには、もつれた糸をほどき、新たに組み直すほどの手間がかかる。したがってニュース翻訳は、英文媒体の現場で少なくとも数年

間訓練を受けた英文記者に頼らざるを得ないのである。

他言語と日本語間のニュース翻訳にも同じことが言えるようである。大手紙モスクワ特派員経験者でロシアの新聞記事の和訳に携わっている人に聞いた話だが、翻訳そのものは翻訳会社が行うが、日本語の記事のスタイルになっていないため、大幅書き直しが必要とのことだ。

また、ニュース英訳にあたっては、日本語の原文記事の読者とは異なり、日本に関する知識に乏しい外国人読者にニュースの内容が十分伝わるよう心掛けなければならない。

例えば、「非核３原則」と書くと、日本語を母語とする読者には改めて内容の説明は必要ない。しかし、英文記事の場合は非核三原則の内容を知らない読者にも内容が伝わるよう、“the three non-nuclear principles of not producing, not possessing and not introducing nuclear weapons” などと補って訳す必要がある。

また、2015年9月の安保法案可決、成立のニュースに関しても、日本語記事では「集団的自衛権行使を可能にする安保法案」とだけ書かれており、「限定的」ということが省略されているものがほとんどであった。これは、国会審議において、どのような場合に行使可能かが繰り返し議論され、日本語記事の読者にとっては周知の事実だからである。だが、英訳する場合、“open the way for Japan to exercise the right to collective self-defense” のみであれば、日本の事情を知らない読者からすると「集団的自衛権行使全面解禁」ととられかねない。英国はイラク戦争に、集団的自衛権行使を名目に参戦したが、日本の場合安保法施行後も、そのようなことは認められていない。行使出来る場面は限定的である。したがって “open the way for Japan to exercise the right to collective self-defense in a limited way” などと補って訳す必要がある。

一票の格差の「違憲状態」も分かりにくい表現である。単に “a state of unconstitutionality” と訳した場合、ネイティブスピーカーのエディターが “unconstitutional”（違憲）と書き直そうとする。だが、裁判所の言う「違憲」と「違憲状態」は明確に異なる。「違憲状態」とは一票の格差が直ちに違憲とは認められないが、合理的期間内に是正されなければ違憲と判断される状態をいう。したがって “A state of unconstitutionality refers to a situation in which vote value disparity cannot be immediately deemed as unconstitutional but can be recognized as such unless the gap is rectified sufficiently within a rational time frame.” などと説明を加える必要がある。

逆に、不必要な情報を削除する場合もある。日本語の記事は、他言語と比較して、余りにも細かい情報にこだわる嫌いがある。例えば難しい漢字の並ぶ病名をそのまま書く場合が多いが、英文記事では脳梗塞でも “stroke” で済ませるのが原則である。“cerebral infarction” とするとネイティブのエディターが「これは何か？」と訊いてくる。ネイティブのエディターですら分からないものは、読者には余計に伝わらない。脳卒中の中でも特に脳梗塞であるということが重要な意味を持つ場合は、“cerebral infarction” として、その病気の中身について簡単に説明を加える必要がある。

また、事件の凶器についても「刃渡り何センチの包丁」などという表現が日本語記事には多く見られるが、「包丁」というだけで、読者はどのくらいのサイズかは大体想像出来る。よほど大きいものや特徴のあるものでない限り “kitchen knife” で事足りる。余りに細かい情報を詰め込むと、かえって読みづらくなる。

このように、日本語のニュースを英訳とは、日本語の元原稿の情報をベースに、英文記事の論理の流れに従って再構成し、読み手の日本に関する知識を十分考慮して情報を補い、必要に応じて説明を加え、無駄な情報をそぎ落とすというということである。これが出来なければ、読者にニュースを伝える「コミュニケーション」は成立し得ない。

シンポジウム

翻訳・通訳のコミュニケーションをめぐって

伊 原 紀 子
(翻訳研究家・関西学院大学非常勤講師)

1. 機能主義的翻訳理論

近年、時代と共に翻訳のニーズが多様化し、様々な方向から翻訳研究が行なわれている。ここでは、機能主義的翻訳理論の立場から翻訳について述べたい。

機能主義的翻訳理論では、起点テクスト ST (source text: オリジナル) にあるどの情報を、どのように目標言語の文化・社会に伝えるかを考える。この異文化コミュニケーションにおいて最優先されるのは翻訳の目的、つまり目標テクスト TT (target text: 翻訳されたテクスト) にどのような機能をもたせるかという事であり、この目的が翻訳の手法から内容の選択や編集をも決定する。

翻訳のコミュニケーションは、翻訳者を中央に置いた2段階のプロセスとなり、送り手と受け手のコンテクストの間に、時間的・空間的な大きな隔たりがある。翻訳者はその隔たりをどのように処理して埋めるかを考えるが、隔たりが大きいほど ST のすべての側面に忠実な TT を作成することは不可能となり、何を維持して何を削除できるかが問題となる。例えば専門書を研究者や学習者の為に訳す場合と、素人の一般読者のため、或いは小・中学生向けに訳す場合では、訳語選択や維持すべき情報が異なってくる。また、ST の意味内容だけではなく、言語形式の特徴を移すことが求められる翻訳もある。詩歌の翻訳や広告翻訳でも、文章のリズムや語呂合わせなど言語形式が問題になる場合が多い。このように、あるテクストに対して唯一絶対の正しい翻訳というものはなく、そのコミュニケーション状況のなかで、最も適切な翻訳が目指されるということになる。

2. マルチモード翻訳について

昨今ではインターネットの発展と共に、マルチモード型翻訳の需要も急増している。60年近く前に、言語学者ヤコブソンは翻訳について記した中で、言語内翻訳、言語間翻訳に加えて、記号間翻訳を挙げた。これは、文字で書かれたテクストが、音楽、映画、写真など言語以外の記号体系によって表現されることを言い、マルチモード翻訳に関わるものである。

例えば村上春樹の『ノルウェーの森』の映画化を例にあげよう。小説ではキズキが自殺を図る様子が、3行のナレーションによって描写されている。一方映画では、先ずガムテープで目張りされた薄暗い車の中のキズキが映し出される。彼がエンジンをふかせる音に続いて、ゴムホースをつたって流れ込んでくる排気ガスのシューシューという音と、キズキの顔をめがけるように吹き込んで広がる白い煙の映像が、息詰まるような臨場感を作り出す。キズキが苦しそうに運転席から後ろの席に倒れこむと、そのまま彼が死んでゆくことが認識される。この間言葉は一言も発せられない。ST の小説の言語が、視覚と聴覚の異なった記号で「翻訳」された、つまり記号間翻訳がなされたということになる。この映画を外国で放映する場合は字幕翻訳か吹き替えが選択され、言語間翻訳と記号間翻訳の両方

が関与することになる。特に字幕翻訳の場合は字数制限や持続時間の制限があり、発話行為を簡潔に訳すのが先決で、登場人物の特徴的な言葉遣いなどを付ける余裕が無いが、そこは役者の雰囲気や、話し方、表情などの視覚的・聴覚的情報で補完される。

反対に、こういった多種の記号からの情報が制約になることもある。例として、アイポッドタッチのネット上の広告翻訳を挙げる。この広告は、商品の発売に合わせて、素早く情報を流すことが目的と考えられ、殆どがSTの説明を忠実に伝えており、画像はすべて日本仕様に変えられている。この中でHDビデオの説明画面があり、ST/TTともに自転車に乗った人物の画像があげられている。宣伝文句はSTでは"you'll never miss a great video op"、TTでは「決定的なチャンスも逃がしません」となり、等価に訳されている。しかしSTの画像が躍動感にあふれ、いかにも「チャンスを逃がさない」という文面に即しているのに比べ、日本語版では自転車に跨った男女の静止画像のようにも見え、文面との整合性が感じられない。この広告翻訳では、「チャンスを逃さない」という利点を効果的に宣伝するのは重要な目的の一つなので、このミスマッチは改善策を考えるべきだと提言できる。このように、マルチモードの翻訳においては、複数チャネルからの情報が利点である反面、それらの間に一貫性が無ければ、説得力が低下するだけでなく、矛盾が起こり得るという制約があり、あらゆる記号の協調性を考えて総合的に翻訳することが肝要となる。

一方、STにある言葉遊び（月面着陸時の有名なスピーチをもじったone giant leap for funkind）はTTでは削除されている。このスピーチ自体が日本人にはそれほどインパクトがあるわけでもなく、等価な効果を持つ言葉遊びに翻訳するのは、至難の業と言えよう。消費期限が短いこの種のネット広告では、表現形式の面白さをじっくり味わうことは目的として優先順位が低く、削除されるのは問題ないと考えられる。このように、目的に即して翻訳を考えるのが、機能的なアプローチである。

3. 小説翻訳の事例研究—話法に着目して

最後に小説翻訳の中の話法表現に関する分析に触れたい。小説では、語り手が登場人物の「声」（や思考）を読者に伝えると考えられるが、それをどう提示するかによって読者の受ける印象が大きく変わってくる。これは、直接話法的表現を好む日本語のコミュニケーションスタイルや、主観的把握と客観的把握という、事態認識の日英の対比に関わる。例えば、英語の間接話法や自由間接話法をその表記通りに間接話法として和訳することは、ごく普通に行われている。しかし、特に自由間接話法の場合、3人称過去時制という形態に捕らわれて、日本語でも語り手視点（間接話法）で訳出すると、STの自由間接話法が表す（語り手と登場人物の）「二重の声」が読み取れず、登場人物との距離感を原作以上に感じたり、場合によっては誰の声が提示されているのか誤解を招く結果にもなる。

この、登場人物の「声」を提示する訳出は、STで話法が関与していないナレーションの中でも可能な場合がある。次の例はE. B. WhiteのCharlotte's Webからである。

ST: Wilber admired the way Charlotte managed. He was particularly glad that she always put her victim to sleep before eating it.

TT: ウィルバーは、シャーロットのものごとのやり方に感心しました。特に彼がうれしく感じたのは、シャーロットは、あみにひっかかった虫たちを食べる時に、かならず、ねむ

シンポジウム

コミュニケーションにおけるコンテクスト共有の重要性
～ 同時通訳の現場から

平島晶子
(会議通訳者・甲南大学非常勤講師)

通訳者は通訳の目的に沿って正確かつ聞き手にわかりやすい通訳を心がけるが、わかりやすい通訳とはどんな通訳か。ひとつは聞き手にとって聞いた訳語の意味が明示的であることである。それには、要件として聞き手と通訳者が「コンテクスト」を共有できていることが挙げられる。そもそも、この「コンテクスト」がわかっているか否かが通訳作業の難易度や精度に大きく影響する。

「コンテクスト」は「予測」の助けになる。同時通訳では同時性の確保のために「予測」、「目標言語での圧縮」、「上位語の使用」などの方略が用いられるが、まず「予測」以外の方略の例を簡単に挙げ、その後「予測」と「コンテクスト」について詳細に述べる。以下に「目標言語での圧縮」の一例を示す。ここでは節を句にして訳出して時間短縮をしている。実験の結果、訳出遅延時間はほんの 1.796 秒であった。

今日資料でお配りをさせて頂いておりますが、
/ 1:03.331
In your handout, you can find...
/ 1:05.127

さて、「予測」には大きく分けて「言語的予測」と「非言語的予測」があるが、「言語的予測」の要素には、文法、語彙、慣用句、そして声の調子や抑揚があり、具体的には、たとえば、日本語の文末の予測や、文章の行方を示す、いわゆる方向指示機能を持つ副詞や接続詞による予測などがある。たとえば以下のような場合は、長い文末（括弧内）は聞かなくても予測できる。

ご指導ご鞭撻（のほどよろしくおねがいもうしあげます。）

さらに、日本語から英語への同時通訳においては、起点言語である日本語では肯定か否定かの決定的表現が文末に来ることが多いのに対して、目標言語では、文のはじめに肯定文か否定文かの決定をする必要がある。が、文末まで待たずとも、（肯定文か否定文かなど）文章の行方を指示してくれる副詞や接続詞を足がかりにそれを予測することができることがある。以下にいくつかの例を挙げる。

あまり（否定）、いちがいに（否定）、一気に（肯定）、必ずしも（否定）、
決して（否定）、さりげなく（肯定）、しきりに（肯定）、全然（否定）、
全力で（肯定）、そんなに（否定）、たいして（否定）、加えて（順接）、
しかし（逆接）、そして（順接）、とはいえ（逆接）